



安心してさりげなく

東北大学大学院環境科学研究科 研究科長

吉岡 敏明 (環境科学研究科・教授)

大学においては3月から4月にかけて学生のほぼ4分の1が入れ替わります。また、近年は9月から10月にも留学生の入れ替わる数が増えてきています。このような状況を踏まえながら、各大学では研究教育活動を環境と安全に配慮して実施するために、様々な取り組みを行い、試行しながら努力しているというのが現状であります。多くの学生や教職員に対する教育プログラムやマニュアルの作成と実践、より効果を高めるための企画の立案とマネジメント改革・強化等、様々な側面からの努力が積み重ねられています。

何故、このような努力が必要なのでしょう？ 研究教育現場での環境・安全管理、労働環境保全、勤務者の健康安全、等々を目指しているから、というのは当然ですが、「関係者が安心して日々の活動を行えるようにするための・・・」というのが究極の目標であるように思います。世の中には危険なモノというのは沢山ありますが、それに全く関与しないのであれば、その危険は跳ね返っては来ません。一方、安全と思っているモノを間違った作法で取り扱えば、それは危険となって跳ね返ってきます。モノと行為がひとつになった時に、はじめて危険が生まれるのではないのでしょうか。言い換えれば、何もモノがなければ危険は生じず、何も行動しなければ危険は伴わないということになりますが、これでは何ともナンセンスの極みになってしまいます。生活をしている以上、我々は常に行動していますので、危険を回避するためには、「モノと行動の関係」を探っていくことが環境と安全に配慮した取り組みの鍵を握ります。

加えて、「必要最低限のモノで事足りる行動」というのも今後は考えていかねばなりません。教職員や学生の中には、短い期間で人が入れ替わることも多く、大学として知らず知らずのうちに必要以上にモノを持ちすぎる場合があります。結果として、不要なストックが増え、環境にも安全にも危険なリスクを蓄えることとなります。

断捨離という言葉が浸透して暫く経ちますが、これは単にモノを対象とするだけでなく、行動についても同じことを言っています。そしてこの根本は空間的・時間的余裕を造り出す方策であるというのが私の認識であり、環境と安全を思考する究極はある意味、断捨離ではないかと考えることもしばしばです。不要なリスクを減らすことによって、「安心してさりげなく」日々を送ることができるようにしたいものです。

今後『環境と安全』が環境安全・衛生管理に関する多くの事例を集約した情報共有の場としつつ、また学術的・教育的体系の基盤となる場となることを期待しています。